

PATENT Attorney

パテント・アトニー

冬

VOL. 56

日本弁理士会広報誌

2009

●「PATENT ATTORNEY」は「弁理士」のことです。



◎ヒット商品はこうして生まれた
天然成分の快眠サプリメント
「グッスリン2V」

●特許調査よもやま話 ●ジャーナリストこぼれ話
●弁理士風土記(デマーク) ●シリーズ特産品(宇治茶)
●知的財産権なんでもQ&A ●漫画「なすびくんのお仕事」
●特許庁からのお知らせ ●JPAA Information

知的財産権なんでもQ&A

Q 雑誌等に掲載する文章を執筆する際に、他人の著作した文章等を引用する必要がある場合があります。引用する際に、著作権の侵害とならないようにするために留意すべき事項を教えてください。

●福岡県／伝統文化・地域史研究者(37歳)

A 著作権32条において「公正な慣行に合致するものであり、報道、批評、研究、その他の引用の目的上正当な範囲内」であれば引用が認められています。具体的要件として、「①明瞭区別性、②主従性、③著作者人格権を毀損しない」が挙げられます。

①「明瞭区別性」とは、引用部分を明確に認識できるか否かということです。

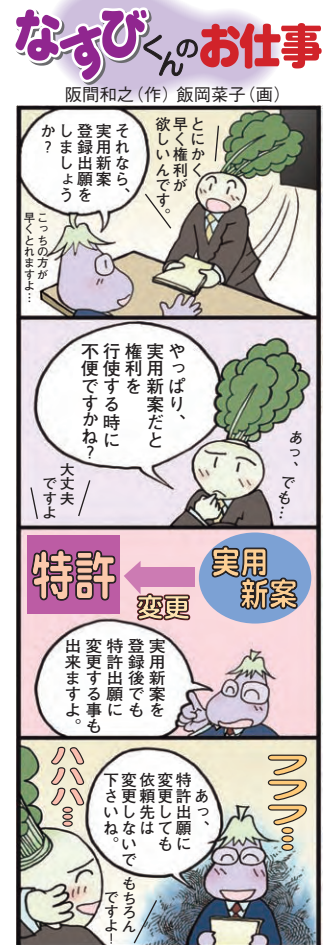
例えば、引用箇所を「」を付けて、引用元の出典を明示することが求められます。

②「主従性」とは、あくまでご自身の著作物が「主」であり、引用部分が「従」の関係であるか否かということです。

③「著作者人格権」とは、著作者に認められた人格的な権利の総称です。引用した他人の著作物の文章を勝手に変えてしまうと著作者人格権の毀損行為となる場合があるので留意が必要です。

上記の点はあくまで一般論であり、きちんと著作権者から許諾を受けることが一番適切です。

◎このコーナーでは知的財産権に関する皆さまの質問にお答えします。質問事項を記載して、下記の住所にハガキまたはFAX.03-3519-2706で日本弁理士会 広報・支援・評価室「Q&A係」までお送りください。



「弁理士Info」 「ヒット商品を支えた知的財産権」 のご案内

知的財産権制度と弁理士の業務について、イラストや図を使ってわかりやすく解説したパンフレット「弁理士Info」及び季刊誌「パテント・アトニー」のヒット商品を支えた知的財産権と題して連載してきた内容を1冊にまとめた「ヒット商品はこうして生まれた!」等のパンフレットがあります。

一般の方には原則として無料で差し上げております。(送料は当会で負担します)
ご希望の方は、下記ご連絡先までお問合せ下さい。

◆連絡先 広報・支援・評価室◆
ご希望のパンフレット名と部数、ご送付先、お電話番号を明記の上、下記までお申込ください。
FAX: 03-3519-2706
mail: panf@jpaa.or.jp

JAPANESE PATENT ATTORNEYS ASSOCIATION
JPAA 日本弁理士会
<http://www.jpaa.or.jp>

PATENT ATTORNEY [パテント・アトニー]

●平成21年12月16日発行 第56号 ●無断転載禁止 ●編集/日本弁理士会広報センター ●発行/日本弁理士会
●〒100-0013 東京都千代田区霞が関3-4-2 ●電話 03-3581-1211(代) ●FAX 03-3581-9188

R2100
古紙配合率100%再生紙を使用しています。

PRINTED WITH
SOY INK

Printed Naturally.

シリーズ「特産品」JAPAN「宇治茶」

商標登録 第2706453号、第2707732号、第5050328号

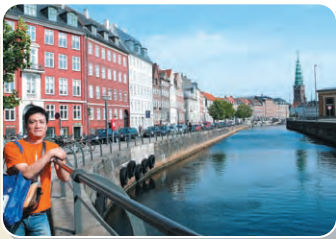
鎌倉時代、梶尾(とがのお)にある高山寺の明恵上人(みょうえしやうにん)が、栄西禅師より茶の苗木を譲り受けることによって宇治に茶が伝えられ、宇治茶の栽培が始まった。現在日本緑茶の約七割は「煎茶」であるが、宇治茶の誕生から今日に至るまでの流れは、抹茶の原料ともなる「碾茶(てんちゃ)」にあり、府内加工業者において現在でも高品質な茶が製造加工されている。江戸時代中期には、永谷宗円によって「宇治茶製法」と呼ばれる現在の「煎茶」の作り方が生み出され、宇治にとどまらず大和(奈良)、近江(滋賀)、伊勢(三重)に広まった。その後江戸時代の後期には、「玉露」が作り出され、日本を代表する緑茶の3茶種が出揃った。

現在でも、宇治茶師から受け継がれた技術において、たゆまぬ製造加工技術の研鑽により府内加工業者が仕上げ加工し良質の宇治茶が届けられている。



このコーナーに掲載御希望の方は、「特産品」のプロフィール・連絡先をFAX:03-3519-2706までお送りください。

市内を流れる水路



成田から11時間かけて到着したデンマークでの生活も早二ヶ月が過ぎました。北欧最南端のデンマーク王国は、海を挟んでスカンジナビア半島の南側に位置しています。首都コペンハーゲンのあるシェラン島とスウェーデンは全長7845mのウーレスン橋で結ばれており、気軽に海外旅行が楽しめます。

面積が九州程度の小国ながら2007年度には一人当たりGDPが世界第6位を記録しています。知的財産に関しては出願の他、特許の商業化にも注力しています。また、日本国特許庁とデンマーク特許商標庁の間では特許審査ハイウェイ試行プログラムが実施されており、

また、デンマーク人は「世界一幸せな国民」としても知られています(消費税率25%、所得税30~65%、自動車登録税180%!であろうとも!)。駅で見知らぬ人に天気について話しかけられたり、バスの運転手が音楽を楽しみながら運転しているのを見ると思わず納得してしまいます。

ただ、北欧人の身長に合わせて、家具の取り付け高さが高い位置にあるのは仕方ないとしても、道路の半分まで渡ると赤になる歩行者用信号はなんとかしてもらいたいものです。私の足の短さはどうしようもないので。

ニューハウンの街並み



シリーズ30 弁理士風土記 (デンマーク)

ブローマン・アンド・ヴィントフト特許事務所
弁理士 岡山 新史

数年前、クワンソウの睡眠改善効果を琉球大学教育学部の上江洲栄子教授が研究、その成果が新聞紙上に発表された。これが、グッスリン2-V開発のきっかけだったと、(株)クレイ沖縄専務 渡嘉敷哲さんは振り返る。だが、この時点では睡眠改善効果をもたらす物質は、まだ解明されていなかった。

沖縄、特に本島では、古くから睡眠改善効果のあるハーブとしてクワンソウ(和名・アキノワスレグサ)が、各家庭の庭に植えられていた。クワンソウはニコウキスゲなどと近縁のユリ科ヘメロカリス属の植物である。しかし、太平洋戦争末期の沖縄戦で市街地が壊滅的な被害を受け、クワンソウもほとんど姿を消してしまった。

独自の製法を確立し、特許を取得している。この濃縮もろみ粉末は、パン、麺類、菓子類など多様な加工食品での利用が容易だ。多くが産業廃棄物になっていた黒麹もろみ酢に有効活用道の道を拓いた点で、環境配慮を重視する企業にも注目されている。渡嘉敷さんは「眠れない時に、クワンソウの茎を豚肉と煮込んで食べるとよいと言われていたことがヒントでした」という。豚肉の代わりに、多様なアミノ酸を含むもろみ酢粉末と組み合わせた、快眠サプリメントのアイディアが生まれた。製品の信頼性を高めるためには、クワンソウの睡眠改善効果を実証しなければならい。世界的に睡眠研究で知られる大阪バイオサイエンス研究所に、飛び込みで共同研究を持ちかけたことから、同志社女子大学薬学部も加えた共同研究が始まった。三者の研究により、睡眠調節物質「オキシピナニン」

が見いだされ、その誘導体とともに「睡眠改善剤」「鎮静剤」として特許をPCT出願した。さらに栽培・育種で琉球大学と連携、経済産業省の地域イノベーション創出研究開発事業にも選定されている。グッスリン2-Vは、沖縄県などの出資によって設立された沖縄県物産公社と連携、販売している。同公社によるモニターアンケート調査では、20代から80代のモニター385人のうち約6割から、睡眠改善効果があったとの回答を得ている。2008年夏の発売以来、同公社の広報や口コミで、グッスリン2-Vの反響は広がっている。渡嘉敷さんは、クワンソウをウコンと同様に、健康増進に役立つ沖縄の特産品として広めたいという。特許に守られたクワンソウの有効成分をいかに、新たな製品を世に出していく構えだ。

ヒット商品は、こうして生まれた!

ヒット商品を支えた知的財産権 VOL. 56

天然成分の快眠サプリメント「グッスリン2-V」

特許 第4295756号
商標登録 第5176687号



沖縄野菜の「クワンソウ」からできました!



に相当します。)は「Searete LLC」です。ビル・ゲイツ氏が特許を申請した、と話題になったようですが、ちょっとニュアンスが違います。日本特許出願を探しても、台風防止装置(特許2727128)、「台風や竜巻の勢力を弱くする装置」(特開2007-75077)、「熱帯の低温暖海洋深層水を利用し、熱帯低気圧や台風などの発生を抑え、維持、発達させないシステム」(特開2009-100732)などが見つかります。(弁理士 鈴木利之)

特許調査もやま話

米国マイクロソフト社の創業者のビル・ゲイツ氏がハリケーン抑止のための米国特許出願を申請をしていたことが話題になりましたが、調べてみると、数件の米国特許出願公開が見つかります。例えば、そのうちのひとつのUS2009/0173386A1は発明者が13人いて、その中のひとりが「William H. Gates, III」です。また、その譲受人(日本特許出願の出願人

人と医療

ジャーナリストのぼれ話



どんな医療技術・機器であれ、実際に病院で医師により行われる治療行為には、その安全性や有効性を確かめる治験や臨床試験が行われている。その前に行われる動物実験については話が長くなるので省くが、安全性や有効性を確かめるには相当の時間と手間がかかっている。

一般に、日本では新しい治療薬や医療機器などの承認に時間がかかり、保険適用には更に時間がかかる。健康な時には思い至らないが、方法があっても使えないというのは辛い事だ。しかし安全性を蔑ろにする事もできない。医師はジレンマに陥るという。

話は急に俗っぽくなるが、保険適用された治療の場合、新しい技術が使われても患者に請求できる金額はほぼ決まっている。つまり新しい医療機器などの導入費や材料費は病院負担になる。それでも導入される事も多い。受ける側とすると有り難いが、病院や医師、技術者の立場を考えると気の毒な事だ。他人事だから言えるが割に合わない。

人の命が大切なだけ、それと向き合う必要もあるだろう。(鈴木)